

東日本大震災復興とE S D

— 気仙沼市の事例を通して —

中澤 静男

(奈良教育大学 持続発展・文化遺産教育研究センター)

及川 幸彦

(気仙沼市教育委員会)

A Study of the Relationship between Education for Sustainable Development
and Reconstruction of Earthquake East Japan
- A case study of Kesenuma city -

東日本大震災復興とESD

－気仙沼市の事例を通して－

中澤 静男

(奈良教育大学 持続発展・文化遺産教育研究センター)

及川 幸彦

(気仙沼市教育委員会)

A Study of the Relationship between Education for Sustainable Development and Reconstruction of Earthquake East Japan －A case study of Kesennuma city－

Shizuo Nakazawa

(Center for Education and research of Sustainable Development and Cultural Properties,
Nara University of Education)

Yukihiko Oikawa

(The board of Education in Kesennuma city)

要旨：2011年3月11日午後2時46分に発生した東日本大震災では、自然の脅威と人間の無力さを感じさせられた。しかし、地球に住む私たち人間の持続可能性は、自然と共生することである。また、当たり前と思っていた日常生活が、決して当たり前のものではなく、自己を取り巻く人間関係や地域社会がかげがえのないものであることを教えられた。大震災とそこからの復興努力において、再認識を迫られたこれらのテーマは、持続可能な開発のための教育（以下、ESD）のテーマでもある。本稿では、大震災を現地で小学校の教頭として体験され、現在は教育委員会副参事として気仙沼市の教育復興に取り組まれている及川幸彦氏の本学での講演内容をもとに、これからのESDで育てるべき能力や価値観について3つの視点から考察する。一つ目に避難の実際を教訓としたクリティカルシンキングの育成、二つ目に自然への態度、三つ目が当たり前生きることの大切さである。

キーワード：持続可能な開発のための教育 ESD (Education for Sustainable Development)

東日本大震災 Earthquake East Japan、クリティカルシンキング Critical Thinking

1. はじめに

2011年3月11日午後2時46分に宮城県牡鹿半島の東南東沖130kmの海底を震源とした、マグニチュード9.0の巨大地震が発生した。またこの地震による津波が東北地方と関東地方の太平洋沿岸部をおそい、12月1日現在、死亡者数15,000人以上、行方不明者3,500人以上という、未曾有の大災害となった。

2011年10月28日に本学の教養科目「持続発展教育（ESD）概論」において、及川幸彦氏に「東日本大震災からの教育復興と未来づくりのESD」と題した講演を行っていただいた。及川氏は東日本大震災発生時には気仙沼市立中井小学校の教頭として児童の命を守られ、この4月からは気仙沼市教育委員会副参事として、

気仙沼市の教育復興に携わっておられる。

本校では、及川氏の講演記録をもとに、東日本大震災及びその復興について、ESDの視点から問い直すことで、東日本大震災以降の教育現場において子どもたちに育てたい力や価値観について考察を加えたい。

考察の視点は次の3点である。第1に避難の実際を教訓としたクリティカルシンキングの育成である。第2に自然への態度である。そして第3に当たり前生きることの大切さである。

及川氏の講演に際しては、受講生だけでなく、本学の学生、教員など70名の参加があった。将来教員を志望する学生にとって、及川氏の貴重な体験を踏まえた講演は大変刺激的で、また示唆に富むものであった。本稿の最後に、学生の感想も記したいと思う。

2. 避難の実際とクリティカルシンキング

2. 1. 地震発生時の気仙沼市立中井小学校

私は、現場にいてですね、卒業式の練習に出ていたんですけどね、クライマックスにさしかかっています、別れの言葉っていうのが、あるんですけどね、子どもたちがよびかけをするんですね。そのクライマックスにかかった時ですよ。そろそろ終わりだから、何をコメントしようかなと思って、メモを書き始めた時に、ガラガラッと来てですね、そして体育館に私は、いましたんで、ステージの上で卒業生が別れの言葉、在校生はフロアで自分の椅子に座っていたんですけども、在校生は、どうにか椅子があるので、その下に頭だけ隠して、お尻は、勿論出したままですけど。上の電器、スピーカーがグラグラグラグラ揺れているし、よく卒業制作で、壁面に色々飾るじゃないですか、それがグラグラ揺れて、もう大変な状況でした。一緒にいた教員達も、プレゼン台の下に頭隠したりですね、パイプ椅子で、こうやっていましたね。私だけが一人、そういうわけにもいかないので、ステージに上がって、子どもたちを集めてですね、でも集めてもどうしようもないですね。自分が覆い被さって。全然役に立たないんですけど、やった記憶があります。でも、それでも、これで終わりかなと思うと、またガタガタと来て、それが3、4回繰り返しましたね。地震の断層が、どんどん連続的に崩れていって、それが本格的な揺れになるんですね。マグニチュード9.0です。

大震災発生時の生々しい証言である。地震はいつ発生するか予想がつかない。全国の学校において、地震発生時の避難訓練が行われているが、それは本当の地震発生時にどれだけ効果を発揮するものなのか、疑問である。教員にとっても子どもにとっても、それは正に「訓練」であり、マニュアル通りに行動することが求められており、自分で考えて行動することは、求められていないと言っても過言ではないだろう。

筆者が勤務した小学校においても、毎年、学校生活に一番支障がなく、休み時間や給食配膳中等を避けた一番混乱が生じない時間帯に避難訓練が実施された。地震発生による火災発生場所も毎年決まっていた。児童への指導内容は、「おはし」（おさない、はしらない、しゃべらない）だけである。誰が作成したともわからないマニュアルに従って進められ、地震発生時から全校児童避難完了までの時間を計測し、学校長による講評が行われるという年中行事化した避難訓練が行われている学校が多いのではないだろうか。

2. 2. 大津波発生時の避難について

親が不安なので、学校に押し寄せるんですね。子どもが心配なのでね。押し寄せたらどうなるか。親は、子どもを引き取りたがる。何かあった時、非常変災時には、子どもを引き渡すっていう暗黙の了解があったので。ところが、ところがですよ、私の学校は高台にあるわけです。つまり、学校にいるのが一番安全なんですよ。そこから、わざわざ子どもを帰したら、どうなるか。みんな、高台から降りていく。自分の家に。海岸沿いにある家が結構あるんですよ。そこに向かって帰るんです。そこはちょっとマズイだろうと言うことで、必死に引き留めて。(中略)うちの学校も正式な避難所じゃなかったから、食料も備蓄も無かったんですよ。発電機もね。だから、親に言われるのも最悪でね。「ここにいろって言うけど、ここで夜を明かさせるつもりか。発電機はあるのか。」「ありません。」「備蓄の食料はあるのか。」「ありません。」「毛布はあるのか。」「毛布もありません。」「何言っているんだ。そんなところで泊まれるわけねーだろ。」となりますよね。かなり、噛みつかれましたけど。ここで喧嘩しても仕方ないなと思って必死にこらえましたけども。下手に手を出さない様に。罵倒され続けました。でも、まあ結局は、そうやって、ある程度まで我慢して、子どもをおいていた事が、結果的に子どもの命を救ったわけですから。(中略)

親が来てしまっ、親は親権があって、親の権利を持っていますから、帰せと言われてたら、学校は本来ですね、何があっても留める事が出来ない。だから、どうしても引き留められなくて帰ってしまった学校もあった。

災害発生時にはできるだけ速やかに、保護者に子どもを引き渡すのがこれまでの常識であり、どの学校においても混乱なく引き渡すための「引き渡し訓練」を実施している。しかし、及川氏の学校ではマニュアルを鵜呑みにすることなく、自らの判断で子どもの引き渡しを拒否し、結果として子どもの命を守ることができた。

2011年6月3日に「我が国における『国連持続可能な開発のための教育の10年』実施計画」(以下ESD実施計画)が改訂され、ESDで育みたい力が初めて明示された。その中に批判力を重視した代替案の思考力(クリティカルシンキング)がある¹⁾。今回の東日本大震災発生時には、教員のクリティカルシンキング能力によって、その対応が異なった。及川氏の講演の中では、一時避難場所である校庭に避難したが、危険を察知して次の避難所、次の避難所と、五次避難までして子どもを守った学校の事例が紹介された。マニュアルは尊重するが、それに頼り切ることなく、自ら状況判断し、行動することの大切さが浮き彫りになった。クリティ

カルシンキングは災害発生時だけでなく、日常の社会生活においても必要であり、教員だけでなく子どもを含めたすべての人が身につけるべきものである。しかしそれは理解し記憶することに重きを置いた従来の知識伝達型の学びで獲得できるものではない。

2. 3. クリティカルシンキングを育てる学習

クリティカルシンキングについて、国立教育政策研究所（2009）は「学校における持続可能な開発のための教育（ESD）に関する研究中間報告書」において、「合理的、客観的な情報や公平な判断に基づいて本質を見抜き、ものごとを思慮深く、建設的、協調的、代替的に思考・判断する力ととらえ、国際標準の学力として注目されているキーコンピテンシー（OECD、2005）における相互作用的に道具を用いる力と関連する²⁾」と指摘している。

またメディア等の教育工学の立場から教育方法を研究する小柳（2003）はクリティカルシンキングの「批判」概念の検討を行い、その意味には西洋で尊重されてきた「論理的・分析的・合理的」な意味を持つと共に志向性と結びつく、「自己省察や生き方への模索」の他に、「個人的性格」「一般性追求」「対話への配慮」とも関わっていると述べ³⁾、クリティカルシンキング育成におけるメディアリテラシー教育の有用性を指摘している。

一方、eラーニングと学習環境デザインを研究する久保田（2001）は、構成主義の学習理論においては、客観的な知識は存在せず、知識は相対的なものと規定されると述べ、その理由として知識は人間の個人的な体験や個人の所属する文化等と切り離すことはできないため、各人がそれぞれ世界を違った形で理解すると考えられている⁴⁾と紹介する。構成主義の学習理論を援用するならば、地震災害のとらえ方が各人によって違っており、誰かによって作成されたマニュアルの絶対性が失われると共に、マニュアルの読み解き方も多様なものになってしまう。この間隙を埋めようとする努力が対話を中心に据えた協同的な学びである。学びの共同体を提唱する佐藤（1995）は、コミュニケーションによる思考の構成がデューイとヴィゴツキーの共通点であると指摘し、知識は学びの活動とコミュニケーションの過程において連続的に構成され、変容し発展し続けるもの⁵⁾であると述べる。つまり、構成主義の学習理論を援用した学習においては、知識はそもそもコミュニケーションによって批判的に検討を加えられるべきものであり、無批判に暗記するものではない。

ヴィゴツキー（2001）によれば、子どもは子ども自身の生活経験の中から発生する生活的概念⁶⁾をもとに思考するが、異なる生活経験を持ち異なる生活的概念を持つ他者とのコミュニケーションを中心に据えた学びによって、自己の見方・考え方と異なる見方・考え

方に接することが可能となり、それによって自己の考え方やその思考方法そのものを問い直す契機が開かれる。クリティカルシンキングの育成には、知識伝達型の学習ではなく、コミュニケーションを中心に据えた知識構成型の学習を継続的に行っていくことが一つの有効な方法であると考えられる。

3. 自然への態度

3. 1. これからの気仙沼市の教育の方向性

自然の驚異のもとに我々は大きな痛手を被ったわけですが、かといって、我々は、自然を切り離して生きていけるか。災害計画のタイトルは何かというと、これなんです、海と木。つまり津波でやられた気仙沼が、これから目指す方向は、自然と共生して、いかに豊かな暮らしが出来るか。その自然の恵みをいかに町づくりにいかせるか、という事も非常に大事な事ですね。そういう教育を我々は進めて来たんだけど、それをさらに一層やっていかなければいけない。

また及川氏は震災後に行われた気仙沼市立階上中学校の卒業式で読まれた梶原裕太君の答辞を紹介された。その一部を掲載する。

（前略）自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というには、むごすぎるものでした。つらくて、悔しくてたまりません。（中略）しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていくことが、これからの私たちの使命です。（後略）

以上の2つに共通するのは、自然との共生という志向性である。自然を征服したり、自然から離れたりするのではなく、自然を生かし、自然と共生しながら助け合って生きていこうという態度を読み取ることが出来る。

3. 2. 自然環境とESD

地球規模の環境破壊を研究する古川（2001）は「自然は人間に奉仕すべき存在として拷問し破壊して顧みない態度は重なってきた。それが西欧近代文明の特質である⁷⁾。」と述べる。日本社会も明治以降、この近代化路線を邁進してきた。四季がはっきりしており、固有の生物種も豊富な日本では、自然を敬い自然に感謝し、自然を征服するのではなく、自然との共生を喜ぶ心性があったことが枯山水などの庭園や短歌や俳句などの文学、華道などからも明らかである。古川はさらに「地域という動的統合体の根底には生命体の生命論理があるのだが、生命論理への同調の仕方は工業圏、商業圏、農業圏、狩猟・漁撈圏、牧畜圏といった生活

様式によって相当変わる。後三者では、生態論理が優先するが、前二者では文明論理や覇権論理への同調が優先することもある⁸⁾。」と指摘しているが、農業国であった日本が工業国へと変化するにしたがって、自然への態度が変わってしまったのかもしれない。

ピューリッツァー賞を受賞した生物学者であるジャレド・ダイヤモンドが森林破壊によって文明が崩壊したイースター島と現代の環境破壊が進行する地球を比較し、「イースター島民には、窮地に陥ったときに逃げる場所もなければ助けを求める相手もいなかった。わたしたち現代の地球人にも、事態の深刻さが増したときに頼っていきける先はない⁹⁾。」と述べるように、私たちは地球という自然環境の中でしか生きていくことはできない。そして今回の大震災から明らかのように、私たちが自然を支配することはできない。環境ジャーナリストの井田（2010）が述べるように、「人間も地球の生態系の一部であり、その恩恵なしには一日たりとも生きていくことができない、という当たり前のことを思い出すことが求められる¹⁰⁾。」人間も自然の一部にすぎないということを肝に銘じて、自然を敬い、自然と共生する以外に未来はない。

しかし、食料自給率を40パーセントにまで落としてしまった日本の都会に住む子どもは、自然に接する機会を奪われている。田畑や広場はマンションや工場に占領され、道はアスファルトに覆われている。昆虫は採集するものではなく、今やペットショップやホームセンターで購入するものになってしまっている。川は暗渠にされ、残っていたとしても川での遊びは危険であるとして禁止されている。このように自然から離れて成長している日本の子どもたちが、自然との共生を志向するとは考えにくい。

ESDと称して、自然を内面化することなしに地球温暖化や生物多様性について学習しても、それは机上の学習で終わる。無理にでも山や川、海に子どもを連れ出し、自然の心地よさや怖さ、深さなどを五感を通して内面化することが重要であろう。

4. 当たり前の生活を問い直す

我々としてはですね、学校をなるべく早く再開しないといけないという新たなミッション。すごい危機感ありましたよ、私もね。つまり学校が始まらないと住民が不安なんです。不安どころか、その地域から出て行く。だって、学校が始まらないとこに子どもを置いて過ごしても、未来無いでしょ。だから学校を再開する事が、その地域に安心感を与えるし、地域の復興につながるわけですよ。（中略）学校再開の初日、最初のスクールバスに添乗しました。色々な避難所を回りながら、学校をいくつか回って降ろして行くんですけども。体育館からね、子どもたちが歩いてきた。そ

の横を親が歩いていてね。バスが発車する時にね、親たちが子どもたちを見送っていたんですけど、みんな、涙流していましたよ。

つまり、何を言いたいかって言うと、学校に通うなんて、当たり前ですよ。給食が出るなんて当たり前でしょ。授業をやるって当たり前でしょ。でも、実はね、当たり前じゃないんですよ。当たりの事がいかに難しいかっていうのが、そういう被災した時とかに分かる。

気仙沼市教育委員会では、教育の復興が地域社会の復興につながると考え、どの被災地よりも早く、学校を再開された。家もない、仕事もない、ふるさとを失ってしまった人々にとって、学校の再開は、日常生活の再構築、人生の再スタートに向けた力強い支援となったことは想像に難くない。

一方、被災していない私たちは、毎日を丁寧に暮らし、地域社会を大切にしているだろうか。そのためには、日々の暮らしがどのようなものの上に構築されているかを知ることが大切である。同じ大津波によって発生した福島第一原子力発電所の事故により、原子力発電の危険性が明らかにされた。2009年度の日本の発電電力量において原子力発電が占める割合は29パーセントであった¹¹⁾。2011年の夏は、全国的に節電対策が取られたが、それでも29パーセントの節電はできていない。つまり、現在の私たちの生活は原子力発電に頼らざるを得ないということである。日本の原子力発電所は、冷却水の取得と温排水の放出の関係上、すべて海岸近くに位置している。今回の大津波の映像を目の当たりにし、原子力発電所の立地する市町村の方々は、不安な日々を過ごされていると思われる。他方、都会に住む私たちは、無邪気な受益者を装い、電気エネルギーを消費し続けている。ESDでは世代内の公正と世代間の公正を問題にしているが、原子力発電所立地地域の住民の不安を顧みずに都会で電気を消費することは、世代内の公正において問題である。また世代内で処分できない核のゴミを将来の世代に押し付けることは、世代間の公正という観点において問題である。

これからは当たり前の生活をかけがえのないものとして大切に暮らすとともに、それがどのようなものによって構築されているものであるのかをESDの視点から問いかけ、世代内の公正とともに、将来世代から責められることがないように一人一人の行動の変革によって改善していくことが求められている。

5. まとめ

及川氏の東日本大震災の体験を踏まえた講演は、受講者全員の心に響くものであった。改めて被害の大きさとその復興の険しさが痛感させられた。特に関西方

面ではメディアで取り上げられることが少なくなるに従い、「過ぎ去ったこと」として忘れ去られていくように思えてならない。大震災を教訓とし、持続可能な社会の構築に向けて一層のESDの普及と推進が求められる。

最後に受講した学生の感想文を紹介し、まとめて代えたいと思う。

半年以上も前の3月11日、私はテレビや新聞で報道される悲惨な大災害の様子を呆然と見るしかなかった。この半年もの間、自分のできることは何だろうかと考えても、ほとんどこれといったアクションも起こせていない。しかし今日の及川先生のお話を聞き、教育が担っているものについて考えさせられた。「教育の復興は地域の復興を牽引する」という言葉を聞き、生活すら危うい状態なのに、学校再開に向けて教室用のスペースをつくっていた報道が思い出された。地域の人々が教育の復興・再開を望んでいるのだと、教育に求められているものに気づくことができた。もうひとつ、ESDでつながっている奈良の私たちにできることは何なのだろうか。長い目で見て、奈良でもESDを広げ、持続可能な社会づくりの担い手を育てることも支援と言えるのではないだろうか。誰かを通して、何かを通して想いはつながると思うから。

- 10) 井田徹治『生物多様性とは何か』岩波書店(2010) 223頁
 11) 電気事業連合会「図表で語るエネルギーの基礎2010-2011」(2010) 20頁

註

- 1) 「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議「我が国における『国連持続可能な開発のための教育の10年』実施計画」(平成23年6月3日改訂) 11頁
- 2) 国立教育政策研究所教育課程研究センター「学校における持続可能な開発のための教育(ESD)に関する研究中間報告書」(平成22年9月) 13頁
- 3) 小柳和喜雄「批判的思考と批判的教育学」『批判』概念の検討』『奈良教育大学教育実践センター研究紀要』Vol.12奈良教育大学教育学部附属教育実践センター 14-15頁
- 4) 久保田賢一『構成主義パラダイムと学習環境デザイン』関西大学出版部(2001) 27頁
- 5) 佐藤学「学びの対話的实践へ」佐伯胖、藤田英明、佐藤学編『学びへの誘い』東京大学出版会(1995) 70頁
- 6) ヴィゴツキー『思考と言語』柴田義松訳新読書社(2001) 233頁
- 7) 古川久雄『植民地支配と環境破壊-覇権主義は越えられるのか』弘文堂(2001) 191頁
- 8) 古川、前掲書243頁
- 9) ジャレド・ダイヤモンド『文明崩壊』楡井浩一訳草思社(2005) 190頁